日本薬科大学
NIHON PHARMACEUTICAL UNIVERSITY

# 薬草園の花だより

第32号

2021年（令和3年）10月26日発行

## ■第32号に寄せて

秋が深まってきました。まもなくハロウィンです。そして、やがて確実にやってくる冬を迎える準備時期に入ってきました。薬用植物園でも、秋に播いた各種の植物の苗の世話をしたり、寒さに弱い植物を温室に取り込んだり、根元に藁を敷いてやったり、夏に元気に育ち開花もした植物の球根を掘り上げたりと着々と冬支度を進めています。

今、日本薬科大学の正面玄関前に薬用植物園の提供でメキシカンセージ（別名をアメジストセージとも）が展示されています。シソの仲間にはハーブとして有用な植物が多いのですが、綺麗な花をつけるものもあって私たちを楽しませてくれます。メキシカンセージもそのひとつです。セージは香草類で、1960 年代の映画『卒業』の主題歌ともなった有名な「スカボローフェア」の歌詞にも「パセリ・セージ・ローズマリー＆タイム」と出てきます。葉を手指でこすってそのほのかな香りを確かめてみてください。

芽を出し、葉を茂らせ、やがて蕾を着け、開花し、結実をし、さらには、冬に備えて葉をおとしたり、地上部が枯れたりと、薬用植物は種々の薬の原料となったり、香料の原料となったりする他、彼らは、一年中、種々の生命活動を通しても私たちを楽しませてくれます。このような薬用植物に会いに、是非、機会を見つけて薬用植物園にも足を運んでみませんか。お待ちしております。
（日本薬科大学薬用植物園長／船山信次）

メキシカンセージ

## ■今咲いています・見頃です

秋が深まるとともに涼しくなると勢いを増す植物が元気を取り戻してきました。今、開花中の植物から、今回は、近年手に入りやすくなった中国原産のマイカイと、やはり中国由来で遣唐使が持ち込んだアサガオを取り上げてみました。

**《マイカイと洋バラ》**

マイカイ（*Rosa odorata* var. *plena* 他の学名あり）は中国原産のバラ科植物で、わが国に自生するハマナス（*R. rugosa*）に近い植物です。マイカイは、近年まで入手困難な植物でしたが、最近は大手の園芸会社などから手に入るようになりました。薬用植物園でもさっそく入手し、育てています。かつてマイカイはハマナスとの混同があり、玫瑰と書いてハマナスと読ませていたこともありましたが、現在では両者は別の種の植物であると結論されています。実際に両者を手元で栽培し観察してみるとその違いは歴然としていて、花のつき方は異なりますし、ハマナスは茎に棘が密に付く一方、マイカイの棘の付き方はまばらです。

マイカイ（玫瑰）

建学碑前のバラ

秋に開花する秋バラは春に咲く春バラよりも色あいが深くなると言われます。キャンパス内の建学碑前に秋バラが咲きました。

植栽されているバラはとくにヨーロッパの雰囲気のある植物で、ヨーロッパ自生の野生バラから作り出されたのではと思われがちですが、いわゆる洋バラの先祖をたどっていくと、意外にもその原植物は、中国原産のマイカイやわが国原産のノイバラなどのアジア産の野生バラが中心であることはとても興味深いことです。

なお、バラの仲間は香水や生薬の原料としても有用であり、マイカイもその花を香水原料とする他、お茶に入れて楽しむこともあるとのこと。バラの仲間は、美しい花が私たちの心の薬となるとともに、種々実用的な植物でもあるのです。

なお、雰囲気といえば、ヨーロッパの教会では見事なステンドグラスの「薔薇窓（ばらまど）」が見られることがありますが、これをカタカナ混じりで「バラ窓」と書くとイメージが崩れます。やはり薔薇窓と書くべきなのでしょう。同じ

ようなイメージを湧かせるものにサボテンの仲間の「月下美人」もあります。これをいくら植物名はカタカナで書く習慣があるとはいえ「ゲッカビジン」と書いてしまってはイメージが壊れてしまいます。

**《ユウガオとアサガオとルコウソウ》**

薬用植物園の入り口にあるアーチにユウガオ（*Ipomoea alba*）が花をつけています。ユウガオはアサガオ（*I. nil*）同様にヒルガオ科の植物ですが、ウリ科のユウガオ（*Legenaria siceraria* var. *hispida*）と区別するためにヨルガオと呼ばれることもあります。ヨルガオにはヤカイソウ（夜会草）という別名もあり、アサガオとは逆に、通常、夜になってから咲き、朝にはしぼんでしまう性質があります。

ユウガオ（ヨルガオ）

アサガオ（2021 年 9 月）

ルコウソウ

アサガオは夏の花というイメージがありますが、どちらかというと9 月を迎えるころからよく咲くようになります。ヨルガオはさらに遅くなってから花をつけはじめます。また、アサガオやヨルガオと同属のルコウソウ（*I. quamoclit*）は 10 月を迎えてから本格的に咲きはじめました。

アサガオは中国大陸原産であり、遣唐使が奈良時代あるいは平安時代の初めにわが国にもたらしたと考えられています。アサガオの種子は生薬名をケンゴシ（牽牛子）と称し、下剤としてわが国に導入されたのです。すなわち、アサガオは歴とした薬用植物でした。その後わが国の江戸時代に花卉園芸植物としての発展を遂げて今日に至ります。なお、ケンゴシは現在でも日本薬局方に掲載されているものの、強い腹痛を伴うこともあり、実際にはあまり使われていないようです。

なお、実は上述のウリ科のユウガオとヒョウタン（*L. siceraria* var. *gourda*）の学名は同じで、ユウガオはヒョウタンの変種（var. 以下が異なるのみ）という位置付けです。そして、種々あるユウガオの品種の中でも大きな丸い果実をつけるものがいわゆる干瓢（かんぴょう）の原料となります。また、ユウガオもヒョウタンも苦味の少ないものは食用とされますが、いずれにも時に苦味成分の多いものが混在しており、とくに苦味の強いものを食べて中毒することがあります。中毒症状は唇のしびれや吐き気、嘔吐、腹痛、下痢で、中毒主成分はククルビタシン系の化合物です。

## ■他に次のような植物が開花中・見頃です

秋が深まりましたが、薬用植物園温室北側の道路（青葉通り）沿いの圃場ではセンブリが多くの花をつけています。また、温室ではコーヒーの果実が赤く熟しはじめました。さらに、ホソバセンナの花は終わり近くになっていますが、生薬のセンナ（葉の部分）を見たことはあってもなかなか花を見る機会はないでしょう。是非この機会に間近で観察してみてはいかがでしょうか。インドジャボクの花は下から咲き上がってきて、終わりに近くなってきていますが、この植物は花びらが散ってからの赤色の鮮やかさが秀悦です。

センブリ

コーヒーの果実

ホソバセンナ

インドジャボク

## ■薬用植物園からのお知らせ

**《寒くなってきましたがとくに温室内の薬用植物たちは元気です》**

だんだんと寒い日も多くなってきました。薬用植物園では冬支度も始めていますが、一方、温室内では、これからも次々に種々の花が咲いてきます。バナナは新しい芽を地中から力強く出しはじめました。彼らの生命の営みを見ていると飽きることはありません。薬用植物園ではいつも皆さんのお越しをお待ちしています。是非いらしてみてください。

発行：日本薬科大学薬用植物園